のび太と切り札と人理修復

のびる

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

のび太の切り札の番外編です

世界を救ってくれと頼まれたのび太は、とある世界に行く

オリジナルメモリ有りです

ＦＧＯはオケアノスの途中までプレイしています

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 11
第3話 …… 17

第1話

のび太は何もない、真っ暗な世界に居た
のび太「こ、ここはどこ？」
のび太が疑問に思っていると、鳴滝が突然姿を現した
鳴滝「仮面ライダージョーカー！野比のび太くん!!」
のび太「うわっ!!びっくりした!!」
知らない人が話しかけてきたので、のび太はクエスチョンマークを頭に浮かべていた
鳴滝「すまない、私と君は初対面だったね。私の名前は鳴滝」
のび太「は、はあ・・・・・」
のび太「それで、その鳴滝さんがなんの用でしょうか？」
のび太は怪しみながら質問した
鳴滝「実は、君に頼みたい事があって来たのだ。夢の中までな」
のび太「え、ここって夢の中だったんですか？」
鳴滝「ああ。ここは君の夢の中。ちょっと『夢はしご』を私の知り合いから借りて来たのだ」

『夢はしご』とは、他人の夢の中に入れる道具なのだ。前にのび太は夢はしごを使ってスネ夫の夢に入ったのだ
鳴滝「君には悪いが、夢の内容を無に変える道具も借りてきた。だから、周りは真っ暗なのだ」
のび太『そんな道具あったっけ？』
鳴滝「まあ、ともかく」
鳴滝はそこで切った
なんの意味があるかはわからないが
鳴滝「君には『ある世界』を救いに行って貰いたい」
のび太「『ある世界』？」
鳴滝「そう。その世界は未曾有のピンチに立たされている」
のび太「あの、すみません。みぞうってなんですか？」
鳴滝「・・・・・・・・」
のび太はバカであった
未曾有の意味もわからんバカであった
未曾有とは、前例が無いこと、経験が無いことなどを言うのである
だが本来は違う意味で使われていたようだが、知らんのでググってくれ

のび太「へー。前例がない事を言うんだ」
のび太「それじゃあ、その世界を救ってくればいいんですね？」
鳴滝「あ、ああ。頼んだぞ」
のび太「あっ、ところでどうやってその世界に行くんですか？」
鳴滝「目が覚めたら、そこはその世界だ」
のび太「わかりました」

のび太は夢から覚めた

のび太「う、う～ん」
「フォウ!!フォーウ!!」
のび太『なんだか頬を舐められたような』
ガバッ!!

のび太「こ、ここは・・・・・？」
のび太が目を開けると、そこは見知らぬ所だった
「起きましたか？」
のび太「き、君は・・・・・？」
「私、ですか？」
のび太は首を縦に振る
「私はマシュ。マシュ・キリエライトと言います」
のび太「マシュさんですか。僕は野比のび太と言います」
のび太「ところで、ここはどこですか？」
マシュ「ここの事を知らずに侵入したんですか？」
のび太「侵入？」
マシュ「そうです。この隣に居る・・・・すみません、紹介がまだでしたね。この隣に居る生物はフォウと言います」
フォウ「フォウ!!」
マシュ「ここ、カルデアを自由に散歩している不思議生物です」
のび太「カルデア？」
マシュ「あっ、すみません。質問は後でしてもらって良いですか？まずは先輩の状況

を説明するので」
のび太「あっ、わかりました」
マシュはのび太の状況を語る
マシュ「先輩はここで倒れていたのです。先に見つけたのはフォウさんでした。それを追って私が来まして、倒れていた先輩を見つけたのです」
マシュ「こんな所で、しかもカルデアから支給された服を着用していないと言ったら侵入者と考えるのが妥当だと思いました」
マシュ「しかし、流石にここを先輩が突破できるはずがありません。ここ、カルデアは防犯能力も高いですから」
マシュ「なのでまだ報告はしていません」
のび太「そ、そうなんだ。ありがとう」
のび太は彼女、マシュの雰囲気からか敬語を使うのを忘れてしまった
それだけ後輩感が凄いと言う事である
マシュ「と、いう事で先輩の状況はわかりましたか？」
のび太は首を縦に振る
マシュ「それでは先輩が聞きたいと思っているカルデアの説明をしましょう」

ＦＧＯやっていればわかることなので略（自分がこんがらがっているから略）
シバってレンズだよな？
カルデアスは小さい地球よね？
じゃああの長い名前のやつはなんだっけ？
こういう状況である

マシュ「・・・・・・と、いうわけでカルデアはシバとカルデアスを使って１００年先の未来を観測することをやっています」
のび太『何がなにやらさっぱりだ・・・・』
マシュ「目がぐるぐる回っている先輩にわかりやすく言うと、未来を観測するのがカルデアの基本的な仕事という事です」
のび太「わかりました」
マシュ「それでですが、そのみｒ」
「待ちたまえ!!」
のび太「えっ？誰？」

マシュ「レフ教授・・・・・」
レフ教授と呼ばれた帽子を被った人は、のび太の前に来た
レフ「マシュが言ったが、私はレフ、レフ・ライノールと言う。ここに勤めさせて貰っている技術師の1人だ。ところで、君が侵入者かい？」
のび太「えっ？ま、まあマシュさんが言うにはそういう事になってるみたいです」
レフ「なっている？どういう事だい？」
マシュ「先輩はカルデアを知らない様なんです」
レフ「つまりマシュは『侵入する理由が見当たらない』と言いたいのかい？」
マシュ「そうです。それに、先輩を脅威に感じません」
レフ「ふむ。まあ、立ち話もなんだから余っているマスター候補の部屋にでも案内してくれ。いくらマシュがそう言っても、侵入者な訳だからね。所長に報告してくるよ」
マシュ「わかりました。では先輩、私について来てください」
のび太「わ、わかりました」

のび太「ところで、どうしてマシュさんは僕の事を先輩って言うんですか？年下なのに・・・・」

のび太は聞いてみた
マシュ「さっきも言いましたが、脅威に感じませんし、私が出会った人間の中で1番人間らしいからです」
のび太「そうですか・・・・・・」

マシュ「着きました」
のび太「ありがとうございます」
マシュ「なんの。先輩の頼み事なら昼ごはんを奢る程度までなら承りますとも」
のび太『昼ごはんを奢ってくれるの!?凄いなあ・・・・』
のび太「ありがとうございました」
マシュ「では、運が良ければまた会いましょう」
のび太はその言葉に違和感を覚えた
のび太『運が良ければ?なんでそんな事を言うんだろう』
しかし、考えてもどうにもならないので思考を放棄した
プシュー
ドアの前に立つと、そんな音がして扉が開いた
「入ってまーーーって、誰だ君は!?子供!?ここは僕のザボリ部屋だぞ!!空き部屋だぞ!!

誰の断りがあってここに来たんだ!!」
のび太『いや、なんで空き部屋でサボっているんだろう』
心の中で疑問に思いながらも、口に出さない
のび太「あなたは?」
「僕はＭＡＺＩＭＥに働く医者さ!!」
のび太『いや、サボっている時点で真面目ではないんじゃ』
「それで、君は誰だい?」
のび太「あの、レフっていう人から行けって言われてきました」
「ふーむ、しかし変だね?君の顔が候補者に載ってないよ?」
のび太「実は、侵入者扱いされてるんです」
「なんだって?侵入者扱い?扱いってことは、誰かに頼まれて来たのかな?」
のび太「ええ。だけど覚えてなくて。しかもどんな事を言われたかも忘れてしまって」
「まあ、忘れたものは仕方ないさ。とりあえずお茶でも飲むかい?」
のび太「え、いいんですか?」
「うん。どうせ侵入者扱いされた人の部屋はロックされるだろうし、なら親交を深めた方がいいだろう?」

のび太「そ、そうですね」
のび太『ロックされるんだ』
「自己紹介をしないとね。僕はロマニ・アーキマン。みんなからはロマンと呼ばれているよ。略称だろうね。だけどいいよね、ロマンって呼び方はさ」
ロマン「かっこいいし、どことなく甘くいい加減な感じがするし」
のび太『いい加減でいいのかなぁ』
のび太「ロマンさんよろしく。僕は野比のび太っていうんだ」
ロマン「のび太くんね。よろしく。でも、野比のび太ってさ、のびのびって続くよね。名前の通りのびのび育ってるかな?」
ある程度のびのび育ってるよな
ジャイアンの暴力やリサイタル、スネ夫の嫌味なんかを除けば
のび太「ええまあ」
ウーウー
そんな事を言っていると、地震か何か激しい揺れが発生して、警報が鳴る

第2話

アナウンス「緊急事態発生。緊急事態発生。中央発電所、および中央管制室で火災が発生しました」

アナウンス「中央区画の隔壁は９０秒後に閉鎖されます。職員は速やかに第二ゲートから退避してください」

アナウンス「繰り返します。中央発電所、およびーー」

のび太「何が起こったんですか!?」

ロマン「わからない!!モニター！管制室を映してくれ!!みんなは無事なのか!?」

火災が発生したという事で、かなり慌てている

のび太「ひどい・・・・・」

ロマン「これはーーー」

ロマン「のび太くん、僕は管制室に行く。君は避難するんだ」

のび太『あれって、マシュさん!!?』

モニターの隅に瓦礫に埋まったマシュを見つけた

ロマン「でも、扉がロックされてちゃーーー」

フォウ「フォウ!!」
のび太「フォウ!?って事は、ロックは解除されてる!?」
ロマン「よし、行ってくるよ!!のび太くんは避難するんだよ!!」
ロマンはそう言うと、部屋を出て行く
フォウ「・・・・・・」
のび太「わかってる!!マシュさんを助けに行こう!!」
フォウ「フォウ!!」

ロマン「いや、何してるんだ君!!方向が逆だ!!第二ゲートは向こうだよ!?」
のび太「でも、1人じゃ無理ですよ!!僕も手伝います!!」
ロマン「・・・・・・わかった。でも、隔壁が降りる前に逃げるんだよ!!」

管制室

ロマン「・・・・ダメだ、生存者は居ない。無事なのはカルデアスだけだ」
ロマン「・・・・・ここが爆発の基点だろう。これは事故じゃない。人為的な破壊工

作だ」

のび太「そんな・・・・!!」

アナウンス「動力部の停止を確認。発電量が不足しています」

アナウンス「予備電源への切り替えに異常　が　あります。職員は　手動で切り替えてください」

アナウンス「隔壁閉鎖まであと４０秒」

ロマン「僕は地下の発電所に行く。君は早く逃げるんだ」

ロマンは発電所へと向かった

のび太「よし、マシュさんを探さなきゃ!!」

アナウンス「システム　レイシフト最終段階に移行します」

のび太『レイシフトってなんだろう・・・・』

ガラッ

のび太「あっ!!」

映像に映っていたのと同じように、マシュは瓦礫に埋まっていた
マシュ「・・・・・・あ」
のび太「今、助けます!!」
マシュ「いい、です。どうせ、助かりません・・・から」
のび太「・・・・・助けるよ」
のび太はロストドライバーを装着した
マシュ「せん、ぱい・・・・?な、にをして・・・・いるんですか・・・?」
のび太「大切な、友達だもの」
ジョーカー!!
のび太「・・・・変身」
ジョーカー!!
マシュ「そ、の・・・・すがたは」
ジョーカー「とりあえず、瓦礫をどけるよ」
ガララッ!!
ドーン!!
マシュ「あり・・・・・がとう・・・・ございます」
ジョーカー「お礼はいいから、早く避難しよう!」

マシュ「足が、動きません」
ジョーカー「だったら、おぶっていく!!」
アナウンス「中央隔壁、閉鎖。館内洗浄開始まで　１８０秒」
マシュ「隔壁、しまっちゃい、ました。もう、外に、は」
ジョーカー「なんとかなるよ。いや、なんとかしてみせる」
マシュ「・・・・・・・」

マシュ「・・・・・あの・・・・せん、ぱい」
マシュ「・・・・・強く、抱きしめてて、いい、ですか」
ジョーカーは無言で頷く

頷くしかできなかった
助けると言ったのに
助けられなかった

なんとかすると言ったのに
何もできなかった
悔しかった
なまじ力を持っているが故か
あるいは、その力を過信したが故か
『力を持つ事は、必ずしも＋に傾く事ばかりではない』
光に包まれていくマシュを見て
のび太は、そう思った

第3話

キュウ・・・・キュウ」
「フー、フォウ・・・・」
のび太『また、頬をなめられたような・・・・・・・・」
「先輩、起きてください。先輩」
「起きません。やはりここは、正式な敬称で呼ぶべきでしょうか」
「マスター。マスター、起きてください。起きないと殺しますよ」
のび太「はっ」
のび太は目を覚ました
マシュ「起きましたね、先輩。無事で何よりです」
のび太「今、殺しますよって言わなかった!?」
のび太は驚く
マシュ「言い間違えました。正しくは『殺されますよ』でした」
ちょっと頬を赤くしながら言うマシュ
マシュ「その、想定外のことばかりで混乱しています。落ち着きたい所ですが、今は

周りをご覧ください」
のび太「？」
「ＧｉーーーーｇＡＡＡＡＡＡ!!!」
のび太「うわぁ!!」
のび太はおばけみたいなやつに一瞬ビビる
マシュ「言語による意思疎通は不可能。敵性生物と判断します」
のび太『一瞬びっくりしたけど、アノマロカリスの方がもっと気持ち悪かったな』
のび太はアノマロカリス・ドーパントを思い出しながら思う
マシュ「マスター、指示を。わたしと先輩の２人でこの事態を切り抜けます!!」
のび太「えっ!?」
マシュ「来ました!!」
ユーレイらしきものが、戸惑っているのび太に襲いかかる
マシュ「危ない!!」
間一髪、マシュが持っていた盾で防ぐ
マシュ「大丈夫ですか、先輩」
のび太「マシュさん、あんなに強かったんですか!?」
マシュ「その説明は後でしますから、とりあえず指示をください!!」

のび太「わっ、わかりました!!」
のび太は混乱したのか、ジョーカーに変身しない
のび太「マシュさん、敵を倒してください!!」
マシュ「わかりました。危ないですから、下がってください」
のび太は後ろに下がる
のび太『変身するタイミングを逃してしまったー!!』
のび太はがっかりする

マシュ「やあーーっ!!!」
マシュは盾を使い、ユーレイみたいなのを消滅させていく
マシュ「これで、倒れて・・・・!!」
最後のユーレイも消滅した
マシュ「先輩、戦闘終了です」
のび太「う、うん。ありがとうございました」
のび太は礼を言う
マシュ「ふう、不安でしたが、なんとかなりました」
マシュ「お怪我はありませんか先輩。お腹が痛かったり腹部が重かったりしませんか

？」
のび太「いや、そんなことはありません」
マシュ「それと先輩。私の事はマシュと呼び捨てにしてもらって構いません」
マシュ「あと、敬語も無しでお願いします」
のび太「え、でも」
マシュ「敬語を使われるのは慣れていないので、お願いします」
のび太「わ、わかりまーーーいや、わかったよ、マシュ」
のび太「これでいい？」
マシュ「はい」
のび太『年上の人を呼び捨てにするのは慣れないなぁ』
のび太はちょっと汗をかいた

マシュ「ーーーところで、私がどうして戦えるのかをお話しましょう」
さっきの戦闘が終わって、４分くらい経ってからマシュは言った
マシュ「ですがその前に『サーヴァント』というものからお話しますね」
のび太「さーばんと？」

マシュ「はい。サーヴァントとは、現界した英雄の事を言います。ーーーー現界した英雄と言いましたが、触れる幽霊とでも考えて頂ければいいです」
のび太「触れるユーレイか・・・・」
マシュ「そうです。そのサーヴァント達は、見えなくなることができます。しかし、姿を現したりも、触れたりもできるので、触れる幽霊と言ったのです」
のび太「じゃあ、マシュもそんな事が出来るの？」
マシュ「いえ、私はデミ・サーヴァントなのでできません」
のび太「そうなんだ」
マシュ「と、いう事でこれでサーヴァントの事は話しましたね」
マシュ「次は、私が戦える理由を話しますね」
のび太「デミ・サーヴァントなんだよね」
マシュ「そうです。では、どうしてデミ・サーヴァントになったかと言いますと、先輩の背中に乗っている時に、カルデアに居たサーヴァントが契約を持ちかけて来たのです」
マシュ「戦う力と、宝具を渡すからこの特異点の原因を排除して欲しい、と」
一応、マシュはのび太にもわかるようにかみ砕いて説明している
のび太「そんな声は聞こえなかったような」

マシュ「先輩は焦っていたのでは無いですか？」
のび太「うーん、確かに焦っていたかも」
マシュ「と、まあそういう経緯で私はデミ・サーヴァントとなりました」
のび太「そう・・・・」
のび太「・・・・・でも、助かって良かったね」
マシュ「そうですね。私、あの時、死を覚悟してましたから」
マシュ「血がかなり流れていましたし、医務室まで辿り着いても手遅れになる可能性しかありませんでしたから」
のび太「ごめん」
マシュ「え？」
のび太「助けるって言ったのに、助けられなくてごめん」
マシュ「いいえ、先輩。私は、その言葉を言ってくれただけでも救いになりました。だから、お礼を言うのはこっちの方です」
マシュ「ありがとうございます、先輩。死にかけだった私に『助ける』と言って頂いて」
のび太「・・・・・・ありがとう、マシュ」
マシュ「・・・・・行きましょうか」

のび太「うん」

オルガマリーは、燃え盛る町に居た
周りにはゴーストっぽい敵がいる
オルガマリー「なんでこんな事になるのよ・・・・っ!!」
オルガマリー「助けてよ、レフ！いつだって助けてくれたじゃない!!」
マシュ「オルガマリー所長・・・・？」
オルガマリー「マシュ!?一体何がどうなっているの!?」
マシュ「先輩、行きます!!」

のび太「いや、待って。僕がやるよ」
のび太はマシュをかばうように立つ
のび太「何かあった時に大変になるからね」
マシュ「わ、わかりました」
のび太はポケットからジョーカーメモリを取り出し、ロストドライバーを装着
カチッ
ジョーカー!!
のび太「変身」
ジョーカー!!
ジョーカー「行くよ!!」
ジョーカーは先制してパンチを繰り出す。ただ襲うだけのゴーストには避けるということができなかったようで、顔面にクリティカルヒットした
ジョーカー「これでっ!!」
２体目のゴーストがジョーカーの背後から襲いかかるが、それをわかっていたかの如く、後ろに向けてキックを繰り出す
ジョーカー「よし、これでかなりのダメージを負わせたかな。トドメだ!!」
ジョーカー!!マキシマムドライブ!!

ジョーカー「ライダーキック!!」
ジョーカーは跳ばず、回し蹴りで当てていく
ゴーストは消滅した

のび太「よし、これで終わり!!」
オルガマリー「あ、あなたが侵入者!?」
のび太「えっ、まっ、まあそうです」
オルガマリー「話には聞いていたけど、実際見てみると本当に侵入したのか疑わしくなるわね」
オルガマリー「ボーッとしてそうで、何もできなそうで、のんびりしてそうな感じだもの」
のび太「いつも言われます・・・・・」ぐすん
のび太は少し涙目になる
マシュ「先輩、泣きかけないでください。そんな風に見られても、私は先輩が凄い人だってわかってますから」
マシュが慰める
のび太「・・・・・・・そんなことを言ってくれるのはマシュと親友だけだよ」

ちょっとテンションが下がった気がする
スパロボで言うところの気力―１０みたいな感じである
オルガマリー『えっ、何この空気・・・・・』
オルガマリーは困惑していた。まさかちょっと言っただけで少ししんみりした空気になるとは思わなかったからである
マシュ「と、とりあえずどうしましょうか」
オルガマリー「うえ!?そ、そうね。あなたたちの状況を聞いておきましょうか」

マシュ「ーーーーと、いうことです」
オルガマリー「そう。道理でここにレイシフト出来たワケね」
マシュ「どういうことでしょう？」
オルガマリー「コフィンに入っていなかったからレイシフト出来たの。生身のままでのレイシフトは成功率が激減するけど、ゼロじゃない」
オルガマリー「でも、コフィンはシフト成功率が９５％を下回ると電源が落ちるのよ」
オルガマリー「だから、私とあなたとこいつはレイシフト出来たというかしたの。でも、コフィンに入っていた候補生達は誰もシフトして来てない。理由はさっき言った通

りよ」
マシュ「では、私達3人で冬木の調査をしなくてはいけないという事ですね」
オルガマリー「そういう事」
のび太『何の話かサッパリだ』
のび太は目を回していた。そもそも、レイシフトがどんなのかすらわかっていない
オルガマリー「ーーーーとりあえず、あなた、名前を教えてちょうだい。いつまでもこいつだと面倒だから」
のび太「野比のび太です」
オルガマリー「のび太ね。緊急事態なので、あなたとキリエライトの契約を認めます。ここから先は私の指示に従ってちょうだい」
オルガマリー「まずはベースキャンプの作成ね。いい?こういう時は魔力が収束する場所を探すのよ」
オルガマリー「そこならカルデアと連絡ができるわ」
オルガマリー「この町の場合は・・・・・」
オルガマリー「・・・・私の下がそうなってたわ」
オルガマリー「マシュ、あなたの盾を地面に置きなさい。宝具を触媒にして召喚サークルを設置するから」

マシュ「だ、そうです。構いませんか、先輩？」
のび太「うん、いいよ」
マシュ「了解しました。それでは始めます」

マシュ「これは・・・・カルデアにあった召喚実験場と同じ・・・・・」
ロマン「応答してくれー!!頼むよー!!」
のび太「うわっ!!!なんだ!?」
ロマン「驚かせてごめんね。いやー僕としたことが君のポケットに通信手段の機械を入れといたのを言うのを忘れてね」
のび太「なんでひっそり入れるんですか!!」
ロマン「いきなり僕が飛び出したら面白いかなって思って」
オルガマリー「はあ!?なんであなたが仕切っているのロマニ!?レフは？レフはどこ!?レフを出しなさい!!」
のび太「レフレフレフの3連続だ」ボソッ
マシュ「所長が一番信頼している人ですから」ボソッ
ロマン「ひょーーーっ!!」
ロマン「えっ、しょ、チョチョン!!あっ、噛んじゃったよ。所長!!生きてらしたんで

すか!?あの爆発の中で!?しかも無傷!?ＰＳ装甲でもつけてたんですか!?」
オルガマリー「ＰＳ装甲って何よ！いいからレフを出しなさい!!」
ロマン「そう言われても困る。僕だって作戦指揮なんか取る役目じゃないって事は自覚しているし」
ロマン「今、カルデアには僕を含めて２０人弱の職員しか居ません」
ロマン「僕が作戦指揮なんていう役目をしているのは、僕より上の階級の人がいないからです」
ロマン「レフ教授は管制室でレイシフトの指揮を執っていた。爆発の中心にいた以上、生存は絶望的だ」
オルガマリー「そんなーーーレフ、が？ちょっと待ちなさい。待って、待ってよね」
オルガマリー「生き残ったのが２０人に満たない？それじゃあマスター適正者は？コフィンはどうなったの？」

ここまで書いといてなんだけど、略

ロマン「・・・・報告は以上です」
オルガマリー「わかりました。引き続きレイシフトの修復を最優先で行いなさい」

オルガマリー「私たちは引き続き特異点Fの調査をします」
ロマン「うぇ!?チキンのくせに怖くないんですか!?」
オルガマリー「本当、一言多いわねあなたは」
のび太『なんだか怖い人なのに、チキンなんだ』
オルガマリー「いますぐ戻りたいけど、レイシフトの修理が終わるまで時間がかかるんでしょ」
オルガマリー「なら、修理している間に調査をすれば無駄がなくていいもの」
ロマン「わかりました。了解です」
プツッ
マシュ「では、行きましょうか」
オルガマリー「そうね」